

長期宿泊体験活動検討委員会 第1回 議事要旨

○日 時：令和元年12月20日（金）午後3時15分～4時45分

○場 所：教育委員会室

○参加者：教育長、委員長、委員11名、事務局3名 計16名

1 開会

- ・資料の確認

2 委嘱状の交付

3 教育委員会挨拶（竹内教育長）

- ・セカンドスクールは武蔵野市の教育にとって価値のある重要な事業である。また、内容やその仕組みが評価されてグッドデザイン賞をいただいた武蔵野市に根付いている大事な事業である。
- ・新学習指導要領の内容との調和をはじめ、セカンドスクールでも持続可能性をやり追求していく必要がある。
- ・セカンドスクールを効果的に実施していけるよう、委員の皆さんのそれぞれの経験などをもとに限られた回数の中ではあるが検討を深めてほしい。

4 議事

(1) 委員長・副委員長の指名

(2) 委員自己紹介

(3) セカンドスクールの取り組みと課題（事務局説明）

(4) セカンドスクールの取り組みと課題（意見交換）

(委員長)

- ・各委員から、①セカンドスクール・プレセカンドスクールにどのような思いを抱いているか②子どもたちにとってどんな意義があるか③持続可能な、効果あるものにしていくためにどうすればよいか、などについて述べてほしい。

(委員A)

- ・集団宿泊と分宿では、やはり分宿の方が子どもたちへの教育的な効果が大きいと感じる。
- ・集団宿泊の場合、常に子どもたちに担任の目が向けられているが、分宿では、健康観察や全体プログラムするとき以外では、指導員や宿のお父さんお母さんのお世話になるので、宿のお父さんお母さんたちとの交流や指導員との繋がりというのが非常に大きいと感じている。
- ・プレセカンドスクールは、セカンドスクールへの不安の軽減という面が非常に意義が大きい。また、1泊の場合は、係活動などの仕事がある程度できるようになったところでおしまいになってしまう。プレセカンドスクールは1泊だと子どもたちへ

の効果が少ないだろう。

- ・プレセカンドスクールを5年生のセカンドスクールに繋げていくのであれば、やはり2泊3日ぐらいが適切であると感じている。初日は失敗が多くあっても、2日目3日目になると子どもたち自身の活動が非常に活発になってくる。

(委員B)

- ・セカンドスクールは、1週間の時間の流れが違い、普段学校の中では見ることのできない子どもたちの表情が見られた。この子ってこんな顔見せるんだとか、こういうことが言えるんだとか、こんな人を思いやる面があるんだとか、体験を通してよい時間を過ごしているのだと思う。
- ・少し不登校気味の児童が、セカンドスクールには参加できたり、その後学校に来られるようになったりと、そのような子にとっても、効果があると感じている。
- ・保護者の方からもセカンドスクールへ行った後に「うちの子変わりました。自分のことを自分でできるようになったりとか、なんか表情も変わったりとか、とてもいい経験をしたと思います。」ということもおっしゃっていただいた。
- ・セカンドスクールはぜひ継続していきたい。

(委員C)

- ・今年度から群馬県みなかみ町に場所を移した。長野県飯田市は農村の高齢化が進み、農家泊を一つの村では実施できなくなり、三つの地域に別れてしまっていたため、緊急時のこと、時間的なこと、生徒の安全や病院に搬送する場合などについて考えて、場所を変えた。
- ・今年、群馬県みなかみ町で、テント泊1泊、農家2泊、ホテルが1泊で行った。農家にお世話になる時間が増え、お客様のにお邪魔するのではなく、関わりがすごく深くなった。以前にも増して、別れがたい出会いになったことなどを帰校後の発表の様子からも感じ取ることができた。
- ・学習面でも、「自分たちの身近にある水について考える」など、大きなテーマを設けて、目的を明確にしてダムの見学を行うことができた。そのような、事前学習や事後に取り組めるような場所に出会うことができたので、実施地の変更は非常に大きな意味があったと思う。
- ・当たり前と書いていても実はそうではないものがある、その中に身を置いて、勉強していくことや感じ取っていくということ、その体験の重みはとても大きいし、重要かと感じている。
- ・不登校傾向のある生徒でも宿泊行事に参加し、規則正しく元気に活動する様子が見られる場合もある。

(委員D)

- ・小学校5年生と中学校2年生の娘がいる。
- ・小学校では、宿の方が来校する交流会があり出席した。宿のお母さんは子ども一人一人に手紙を書いてきてくれていた。この子にはこんなところがあります、こんなところがいいところでした、これからも頑張ってくださいというようにお手紙をいただき、自分が泣きそうになった。
- ・子どもは、魚沼の美味しいお米を作るところから見て、自分でも稲刈りなどを体験して、そのお米をいただくということが、どれだけ大切なことかよく分かって帰ってきたようである。とても高揚しながら家に帰ってきて話をしてくれた。

- ・中2の娘が5年生のときには、家に帰りたくない、ずっとここにいたいと言って、泣いていた子もいたと聞いた。すごく宿の方と別れるのが辛かった、とっても楽しかった、と言っていた。そして中2の今でも、5年生のセカンドスクールがやっぱり一番の思い出だと言っている。どうしても嫌いな子と同じ班になってしまったと言いながらセカンドスクールに出発したが、帰ってきたときには、仲良くはなれなかったけどその子の個性を認めるのも大切なことなんだなっていうことを理解して帰ってきた。その子とは今中学校で、とても仲良くなっている。
- ・中学校のセカンドスクールも楽しかったと言っていた。
- ・子どもの話を聞いてこれはどうなのかなと思ったことが雨の日のプログラムについて。中学校セカンドスクールについて、雨の日のことを娘に聞いたところ、漫画を読んでいた宿もあったそうだ。宿によってそれぞれ違うと思うが、中学生のセカンドスクールの活動内容については少し疑問を感じるようなところもある。

(委員E)

- ・小学校に長男が通っていたときは、いきなり長期のセカンドスクールであった。送り出す親としては、1週間よそに預けるということについてちょっと戸惑った。現在高校2年生の長女のときには、最初に2泊3日プレセカンドスクールに行ってから1週間の宿泊という形だった。保護者も、プレセカンドスクールに行ったから大丈夫だよなって子どもに話して行かせるようにできたので、セカンドスクールの前にプレセカンドスクールがあるということは、出す側の親としても安心できるものになっている。
- ・セカンドスクールが6泊7日なのを考えると、プレセカンドスクールはやはり2泊3日は最低でも欲しい。1泊だと一生懸命やっていたら、あっという間に終わってしまうが、2泊3日あると、一生懸命やってもできないことやつまずくことがあったりする。つまりいても回復できたりするのが、ちょうど2泊3日という期間ではないか。また、ジャンボリーに長く携わっている経験から、2泊3日が子どもたちの成長とか子どもたちの動きが、ちょうど見えるサイズだと感じている。
- ・うちの子ども3人とも5年生で行ったセカンドスクールが一番楽しかったと言っている。小学校では、最初にお箸を作って、1週間、その箸を使って食べることになっている。今でも3番目の中学2年生の子は、小学校5年生の時に作ったその箸を家で毎日使っている。学校のことをあまり喋らない子どもだが、これを持って帰ってきたときは、「これ自分で作ったんだよ」と真っ先に言うほどであった。
- ・高校2年生の子が小学校5年生のときのセカンドスクールから帰ってきたときには、しばらくは「飯山に帰りたい」と言っていた。「武蔵野は山がないね」と言っていたので、本当に山に入って遊ぶってということ、自然を体験するということが、子どもにとって大きな経験だったのだと思っている。その子はセカンドスクールが影響したのか、高校に行くときは山があるところに行きたい、自然に触れたいという希望をもっていた。最終的には見直したが、セカンドスクールに行ったら農業をしたこと、山に触れたこと、自然に触れたことをきっかけとして進路を希望した。セカンドスクールの思い出や経験が、子どもの中でずっと育っていたのだと感じている。
- ・引率の先生や、指導員はすごく大変だと思う。毎年指導員が足りないということを学校から聞くので、そこはみんなで今後考えていかなければならない問題だと思う。
- ・4年プレセカンドスクール、5年のセカンドスクールそして中学1年のセカンドスクールがよりよく続いてもらえることを、保護者として強く希望している。

(委員F)

- ・価値ある体験であることはもう言うまでもないと思う。
- ・学習指導要領が変わることに伴い、「授業時間の確保」ということも課題であると考える。現在、5年生の総合的な学習の時間の多くがセカンドスクールで使われており、他の取り組みを設定しにくい状況がある。3年生から始まる総合的な学習の時間は、今回の新しい学習指導要領の検討をしていく中でも非常に大きなポイントになっているように、子どもの主体的で探究的で協働的な学びというところで重視されているものである。セカンドスクールが学校行事なら問題はないと考えるが、本来、地域あるいは身の回りから、自分で課題を設定して協働的に探究的に学んでいく活動が、3年生、4年生ときて5年生が抜けるような形に現在なっている。本校でも工夫しているが、やはり子どもたちのその探究のサイクルをまわしていくような活動にはなかなかおらず、やれることが決まってしまう。稲刈りや箸作りの活動は、子どもの本当の意味での課題解決に繋がりにくい面がある。
- ・人事の話では、セカンドスクールに行く学年を担当できる先生が限定されてしまうという実情があるので、校長の人事構想を作るときにもかなり厳しいものがある。
- ・生活指導員については、特に副校長が毎年苦慮している。以前の大学生と今の大学生とは忙しさが違うようで、大学の授業を休めないなど、1週間宿泊できる生活指導員は非常に稀有な存在になっている。

(副委員長)

- ・この委員会の目的について。一つは、以前のセカンドスクール見直しの検討から10年が経過している状況で、学習指導要領が変わり、武蔵野市においては武蔵野市民科をこれから導入していくにあたり、セカンドスクールでほとんど総合的な学習の時間が取られているという現状を、武蔵野市民科との関係も踏まえて、どのようにしていくべきか考えていく必要があると思っている。また、事務局からの説明にあるように、中学校でのセカンドスクールに対する子どもたちの期待値が小学校に比べるとかなり低いというような状況がある。
- ・中学校におけるセカンドスクールの意義というのとは何か、小学校とどう違うのかあるのか、どういうものを目的としていく必要があるのかということは、今回の大きな検討課題と考えている。
- ・小学校においては、教育課程も過密になる中で、かつ先生の働き方改革も進めていく必要がある中で、長期宿泊体験活動を効率的、効果的に進めていく為に、ご意見をいただいく必要があると思っている。
- ・他にも生活指導員の確保など個別具体的・技術的な課題もあるかと思うが、多面的に検討していただきたい。

(委員F)

- ・セカンドスクールに効果があるのは明らかなので、教員としても行けば「はまる」というか、よりよいものを目指して、プログラムもカリキュラムもブラッシュアップしていきたいという思いになる。子どもたちのもっと生き生きとした笑顔が見たい、先生方はきっとそんな思いで様々な活動について計画している。毎年同じプログラムに見えても、連れて行く子どもによって、工夫する点は違うものである。
- ・セカンドスクールのよい点は、やはり分宿効果だと考える。日光移動教室も、結局通り過ぎる人というか、いつも消費者であるが、セカンドスクールは分宿で宿の子として、農業体験やお手伝いも含めて活動する中で、生産者の思いを直接知ること

ができる。だから、自然にも、農作物にも、そしてそこに生きる人にも親しみや愛情をもつことができる。それでまた仲間への信頼関係も深まっていくのだと思う。そういった意味からも分宿は大切で、宿のお父さんお母さんが見きれぬ子どもの数が大切であろう。また、補助する生活指導員の役割も非常に大きいものと考えている。

- ・非常によい場所でも人は必ず年をとり、地域もだんだんと変わってくるので、持続可能であるためには、定期的に見直していくことが必要だと思う。宿の方の高齢化があり、実施地を変更せざるを得なかった学校も多数ある。
- ・今、一週間心を込めて、子どもたちを受けとめてくれる、そういった集団があるかどうか。お父さんお母さんとしてしっかり受けとめる体力も必要になるし、体験できる環境も必要になる。そういった場所が本当に見つけられるのかということが持続可能なセカンドスクールを考える中で、私が心配している点である。
- ・教員も、子育てや介護など様々な事情で5年生を担当できないということはあるが、なるべくたくさんの教員にセカンドスクールのよさを感じてほしいと思う。

(委員G)

- ・中学生にとってもセカンドスクールはとってもいい経験だと思う。
- ・行き先が各学校に委ねられているという現状があり、場所によって現地の方のかわり方が異なっている。見学場所や体験プログラム等については、宿泊施設の方に相談しつつ教員が自分で探していく学校は、教員の負担が非常に大きい現状がある。
- ・農家に泊まると、子どもの宿泊場所が広範囲に広がってしまうので、子どもたちの様子を把握しきれない場合があること、あるいは、病気になったりしたときに対応が少し難しかったり、迎えに行っている時間がなかったりすることもあり、そのところも少し課題だと思っている。
- ・中学校のカリキュラムに対する期待感や、効果が少し低いという点について。確かに小学校で稲刈りをしてきてまた中学校で稲刈りをするので、中学生としては、これもう1回やったよねというようなことがある。そのため、中学校では稲刈りは手刈りではなくて、コンバインを運転させてもらうなど、似た活動の場合は、グレードアップするように工夫をしている。中学校では、今後、学区内の小学校のセカンドスクールの内容を把握した上で、中学生として同じことをやる場合でも、少しグレードアップできるような体験プログラムを組んだり、あるいは小学校でやってないことを実施するという努力が必要だろう。
- ・生活指導員の確保が非常に大変である。大学生は中学校セカンドスクールの4泊5日でさえなかなか集まらないのが現状で、教育実習生を受け入れたときに、「セカンドスクール行こうね！」と伝えて確保している。生活指導員の質と確保が大きな課題の一つと思っている。

(委員D)

- ・小学校の体験と中学校の体験が、グレードアップしたものに本当になっているのかということについて、実施報告書をしっかり読んで勉強していきたい。
- ・また、中学校のセカンドスクールの中に何か将来ボランティアに参加できるような資格や経験につながるようなものが組み込まれたらいいと思ったことがある。それは、ジャンボリーは小学校の時にいった経験があるからサブリーダーとしてボランティアで参加できるけれども、何もイメージの湧かないところから誘いが来てもなかなか行けないと子どもは言っていることから考えたことである。様々なボランテ

ィアの体験をするための勉強会みたいな時間が少し組みこまれたらよいと思ったことがある。

(委員F)

- ・一つ考えておかなければいけないこととして、今年の、千葉の台風被害のような自然災害などへの対応である。例えば、飯山で道路や鉄道が寸断されたら上越方面にも長野方面にも、動けなくなると予想される。千曲川が決壊したときに、戸狩野沢温泉駅のすぐ近くまで水が来たことがあると聞いている。セカンドスクールをもう少し近いところでできないかと思い、何箇所か自分でも行ってみたい、資料を取り寄せたりして検討したが、これまで飯山が蓄積してきたノウハウがすばらしく、そこまでできる場所は簡単には見つからない。ただ、この数年の天災などの状況を見たときに、学校では子どもの命を預かっているので、本当に持続可能なのかというのはいつも大きな不安になっている。そういう点も、今後考えていく必要があるだろうと思う。

(委員E)

- ・実施地を選ぶのはすごく大変だと思う。子どもたちの安全を守り、それだけの人数を受け入れられる場所がなかなかないというのが現状だろう。今は様々な災害があるので、それを踏まえて先生たちが一生懸命考えてくださって、探していただいることは保護者として、感謝しかない。
- ・さらに、子どもたちにアレルギーがととも増えている現状がある。受け入れてくれるのがホテルであれば、朝食、夕食、お弁当の仕出しまで、全てアレルギー表示をしたり、アレルギー物質を抜いた対応ができるが、セカンドスクールで分宿になると、宿の方からは一応全部のメニューを出して保護者に確認してもらっていても、子どもたちの命を預かるという立場なので、これを食べさせてあげたいけど、食べさせてもいいのかなという不安があるということも聞いた。
- ・民宿の高齢化や子どもたちの食生活の課題があるので、民宿利用や一般の農家に預けるということはすごく大変だと思うが、これをもう少し上手にやっていきたい。
- ・保護者の方でも理解しなければならないことはたくさんあると思う。学校と一緒に子どもたちの体験を繋げていくという意味で、ぜひ学校の先生方も、こういう思いでこの宿泊行事をしています、ということを保護者の方に説明をしていただきたい。私は先生たちからよく聞く機会があるが、ぜひこれから行く学年の保護者にも、そういうお話を聞かせることができればよいと思う。

5 事務連絡

- ・次回の日程調整について